妄想的観念と宗教性および批判的思考との関連

○白崎愛里¹・菅村玄二²

(¹関西大学大学院心理学研究科・²関西大学文学部)

キーワード: 妄想, クリティカルシンキング, 神秘主義

The Relationship between Delusional Ideation, Religiosity, and Critical Thinking

Airi SHIRASAKI¹ and Genji SUGAMURA²

(¹ Graduate School of Psychology, Kansai Univ., ² Faculty of Letters, Kansai Univ.)

Key words: delusion, critical thinking, mysticism

目 的

宗教性と精神病理との関連については過去多くの研究者によって指摘されてきた。James(1902)は宗教の指導的人物がしばしば神経過敏症の徴候を示していることを指摘している。彼らは、「ふつう病理的なものの部類に入れられるあらゆる異常な特徴」を示しており、こうした病理学的な特徴こそ、しばしば彼らに宗教的権威と宗教的感化力を与えるものであった。Schneider(1928)は分裂病者の心的内容の中に宗教的な問題が出現することはきわめて頻繁であると述べ、分裂病者が持つ宗教体験の諸相を記している。しかし、宗教性と精神病との関連は文献研究や、症例研究といった定性的なものが多く、定量的に分析したものはほとんど見受けられない。

そこで、本研究では、宗教性と精神病理、その中でも妄想との関係をクリティカルシンキング志向性をまじえて、定量的に検討することを目的とする。クリティカルシンキングは、批判的思考とも訳され、「理性的な信念と行動のための、合理的で内省的な思考」(Ennis, 1987)といわれる。宗教批判において最もよくとりあげられる問題が宗教と合理性の問題であり(Dawkins, 2007 など)、宗教性と合理性、論理性は相反するものなのか、それとも併存可能なものなのか検討する必要がある。なお、ここでは宗教性とは、宗教観、宗教行動、神秘体験を含むものであると定義する。

方 法

調査対象者 回収数は234名であった。そのうち有効回答数は185名(男性76名, 女性100名, 不明9名; 仏教徒52名, キリスト教徒18名, 無信仰112名; 平均20.1歳, $SD = 5.25$)であった。大学の講義内および、大阪府のプロテスタント教会と大学のプロテスタント系クリスチャンサークルとで調査を行い、質問紙を配布し、後日回収した。

質問紙 (a)廣岡・元吉・小川・斎藤(2001)のクリティカルシンキング志向性尺度(CT; social 版, nonsocial 版)をもとに分析を行った南(2009)の因子分析結果から、因子負荷量が.50未満の項目を除外した26項目, (b)妄想観念チェックリスト(DICL; 丹野・石塚・杉浦, 2000), (c)宗教観尺度(高木・張, 1989), (d)神秘主義尺度(西脇, 2004)。 (e)宗派の回答を求めた。

結 果

DICL と宗教性に関する尺度との関連 DICL を説明変数、宗教観尺度および神秘主義尺度を基準変数とした重回帰分析(強制投入法)を行った。神秘主義尺度の「神秘的合一体験」を基準変数とした重回帰分析で、「被害・加害観念」($\beta = .32, p < .01$)、「微小観念」($\beta = -.30, p < .01$)の標準偏回帰係数が有意な値を示した。

CT 志向性と各尺度との関連 CT 得点を平均値 $\pm 0.5SD$ を基準として群分けを行った。social 版合計は51以上を高群(最大値70)、43以下を低群(min21)、non social 版合計は45以上

を高群(max59)、37以下を低群(min15)とした。

social 版合計(CTS)、non social 版合計(CTNS)別に t 検定を行った。DICL を従属変数とした場合、CTS において、「疎外観念」($t[110] = 3.27, p < .01, r = .30$)、「微小観念」($t[110] = 3.11, p < .01, r = .29$)で低群が高群よりも高い得点を示した。また、有意傾向ではあるが、「被害・加害観念」($t[110] = 1.86, p < .10, r = .18$)で低群が高群よりも高い得点を示した。宗教観尺度および神秘主義尺度を従属変数とした場合には、CTS、CTNS いずれも有意な差はみられなかった。

キリスト教徒でのみ、宗教間尺度の「宗教の否定的側面」とCTの「多様性理解」($r = -.51, p < .05$)、「脱軽信」($r = -.42, p < .10$)、「不偏性」($r = -.46, p < .10$)との間に負の相関がみられた。また、キリスト教徒でのみ、神秘主義尺度の「神秘的合一体験」とCTの「脱軽信」($r = -.41, p < .10$)との間に負の相関がみられた。

考 察

これらの結果から、CT の低さが被害・加害観念に至り、神秘主義傾向に正の影響を及ぼす可能性と、CT の低さが微小観念に至り、神秘主義傾向に負の影響を及ぼす可能性という2つの可能性が見出される。微小観念とは、自分の容姿や能力が他者と比べて低いと感じる信念である。

妄想には、少ない情報から性急な結論づけを行うという推論バイアスがある(Garety & Hemsley, 1997)とされている。本研究の結果は、真正妄想だけでなく妄想的観念においても、情報処理に不合理な、客観的でない方法がとられる傾向があることを示唆している。

また、被害妄想観念が強い者は、曖昧な状況を嫌い、明確な結論付けを求めるという性質があることが報告されている(Freeman et al., 2005)。異常知覚体験といった非常に曖昧な場面においては、被害妄想傾向の強い者は状況を性急に結論付けようと試み、なおかつ目の前の情報にのみ着目すると、それが合理的判断を除外した直観的な神秘性と結び付けることは十分に考えられる。Arieti(1961)は宗教体験が、その体験をした者の自尊心を高めると指摘している。それに対して本研究は、「微小観念」、言い換えれば、自尊心が低いほど神秘体験への親和性が低くなる、あるいは出来事を神秘性と結び付けにくくなることを示唆している。

本研究の意義は、これまで検討されてきた宗教性と妄想的観念の近縁性について、クリティカルシンキングとの関連から、定量的データを与えたことにある。今後は、(a)より詳細な宗派の分類を行い、宗派ごとの違いを解明していくこと、(b)本研究において定義した「宗教性」を、宗教観、宗教行動、神秘体験などより細かな領域で各々妄想との関連を調査すること、(c)真正妄想を対象とした同様の調査を行い、真正妄想と宗教性、CT との関連、本研究における妄想的観念の傾向との違いを比較検討していくことが望まれる。